Knock on the door

vol．６［如月・弥生の扉］

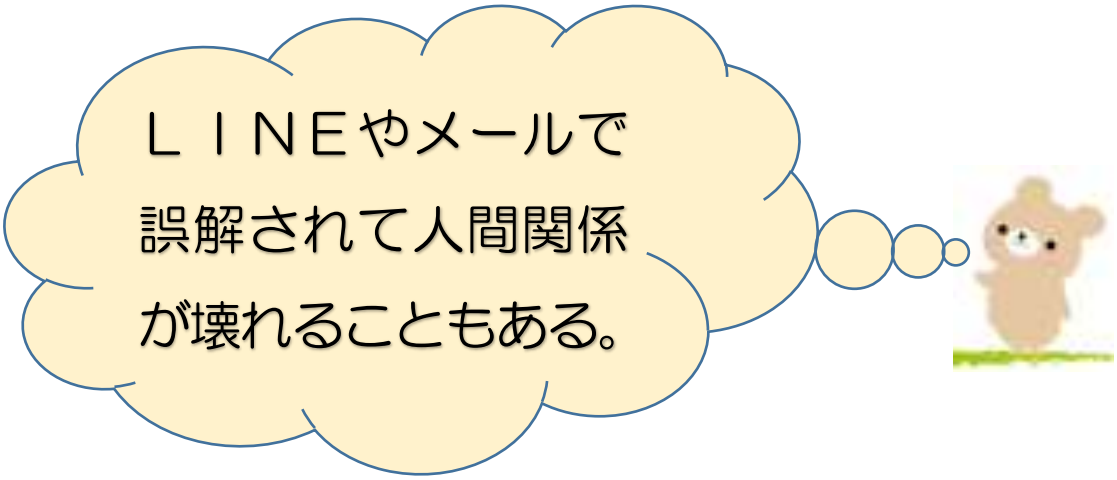
１．日本語って難しい

『お前バカじゃないの!!』

文字で見ると悪口に大抵見えるけど、シチュエーション次第では全く意味が異なるし、文字に見えない裏の感情があったりする。

面識のない他人なら尚更。

だからSNSなどの文字文化は難しいんだろうね。



２．ホルモンはほうるもん

「文化が変われば全く意味が変わる。」それを痛感したのは大阪生まれの伴侶と結婚してからだった。

彼女が福島県のコンビニでアルバイトをしていた頃、同じアルバイトをしていた同僚に、

「このゴミほっといて」

と言ったのに無視されたと怒って帰ってきた事があった。関東に住んでいる人には全く意味が分からないことかと思うが、関西弁で「ほっといて」は「捨てておいて」と言う意味になる。元々日本人には食べる習慣がなく捨てられていた動物の内臓が「放るもん」から転じて「ホルモン」になったのと同じだ。この頃の彼女はまだ

関西訛りが多く残っていた上に関西圏のことしか知らない人だったので、こちらで「ほっといて」というのが、「そのままにしておいて」の意味になることが全く分かっていなかった。

その後も色々なハプニングがあったのだがそれを話すのはまたの機会にして、ここから僕が言いたいのが冒頭の「文化が変われば全く意味が変わる。」ということなのだ。この場合の文化と言うのは産まれた地方と言う意味だけではない。育ってきた、学んできた人生全てと言って良い。個人個人の違い＝文化の違いだと思っている。だから、誰一人として全く同じ文化の人はいないのだ。

生徒達を見ているとこの違いに気付けず、お互いに勘違いしている場面を見かけることがよくある。例えば、同じ群馬県出身であれば「好き」という言葉が別の言葉になってしまうことはないだろうが、好きという言葉の度合いや意味合いは大きく違ってしまうことがある。

一つの事例を挙げよう。近年、若者を中心に「死ね」という言葉が軽く使われる風潮がある。僕からすれば軽々しく使うべきではないとても重い言葉だと思うが、友人同士のつっこみの言葉として使われているのをよく耳にする。お互いにこの言葉の意味合いが軽いつっこみだと認識しあえていれば大丈夫かもしれないが、普段から当たり前のように使っていると、誰にでも自分が思っているように捉えてもらえると勘違いする。自分では親密だと思っていた友達は自分が思っていたより親密だとは思ってくれていなくて、「死ね」とつっこんだことで深く傷つくかもしれないのだ。

このような失敗をしないためにはどうしたらよいだろうか？僕は妻と生活してきた１０年余りで一つの結論を得た。ポイントは

「きちんと丁寧に説明して、話し合うこと」だ。

ある時、妻の発言に対して、「バカじゃないの！」と軽くつっこんだところ、ひどく傷つかれたことがあった。よくよく話を聞いてみると、関西圏ではバカというのは非常に強い言葉で、軽いつっこみの時にはアホと言うことを知った。きちんと話し合ってその意味合いがお互いに理解できれば、失敗に対してすぐに謝ることができるし、言われた側もそういう意図はなかったんだとちゃんと納得が出来る。傷ついた側も傷ついたことを伝えなければいけない。何となくではなく、きちんと言葉で説明しなければいけない。ニュアンスでは伝わらないことが普通なのだ。

人には表情がある。表情には言葉だけでは表せない感情の部分を上手く伝える力がある。とは言え、その表情を読み間違えることだってあるだろうし、電話口や送った文字では表情を伝えることは難しい。他人とのコミュニケーションで重要なのは、丁寧な言葉の選び方だ。しかも、自分の意図していない意味で伝わっている可能性も考えておかなければならない。こういった配慮は面倒だからと放ってしまってはいけないし、出来ないままにほっといてしまってもいけないのだ。

～　教育相談係主任　阿部真一郎　～